

学習者の自己評価・相互評価による学力向上を目指した 音楽科授業計画 (4)

三村 真弓 増井知世子 原 寛暁 徳永 崇

I はじめに

我が国の音楽科授業は、表現と鑑賞の2領域で構成されている。特に表現の領域では、教材を歌唱する、器楽演奏するという音楽活動が中心となっている。これらの音楽活動は、主として、「演奏を工夫する」「表現豊かに仕上げる」ことが目的とされ、その教材を通して、何を学ぶのか、どのような音楽科の学力を獲得させるのかという視点が曖昧なものが多い。つまり、学習者は教材を演奏するだけにとどまり、授業を積み重ねても、それを通して音楽科の学力を獲得できていない状況があるのである。もちろん、音楽活動することによって得られる達成感や感動は重要であり、それなくしては、音楽科授業とは言えないのも事実である。しかしすべての学習者に、教科として保障すべき学力を獲得させることは、音楽科の責務であると考える。

本研究者たちは、音楽科の学力向上を目指し、学習者の自己評価・相互評価による音楽科授業の改善を試みてきた。自己評価カードには、学習で学ぶべき内容が項目としてあげられており、その項目ごとに、内容の到達度を学習者自身が判断し評価するものである。この評価カードによって、学習者は、教師のねらいを知ることができ、学習の目標を明確に把握することができる。相互評価は、2名の学習者間で行う評価と、グループ間で行う評価の2つに分けられる。前者は、自己評価カードの一部を使って行われるものであり、学習者の自己評価が妥当かどうかを、ペアの生徒が評価するものである。これによって、学習者は自身の到達度をはっきりと自覚することができ、教師も正確に学習者の到達度を確認できる。一方、後者の相互評価は、カードあるいはワークシートを使って、グループ発表時に行われる。他者からの評価によって、自分たちの演奏を客観的に把握することが可能になるとともに、他グループの演奏の良さや工夫点を知ることができる。これらの自己評価・相互評価は、いずれも学習

者に学習目標を明確に意識させることと、学習への意欲を向上させ動機付けを強化することを目的としている。以上のように、音楽活動の目的とめあてを学習者にもたせ、音楽科の学力を確実に獲得させたいと考える。(三村 真弓)

II 中学校1年生を対象にした授業の概要と結果および総括

1 授業の概要

中学校1年生のアルトリコーダーの学習で、自己・相互評価カードを活用した。評価カードを活用した期間は、2009年9月から11月にかけての約3か月間である。授業者は1年生のA組とB組を担当しているが、評価カードの有効性を調べるために、A組を統制群、B組を実験群として、B組のみ評価カードを用いた。

昨年度に引き続いての取り組みであるが、昨年度と異なる点は、リコーダーの運指の理解の徹底をはかるために、時々、評価カードのなかに運指を確認するための図を取り入れたことと、教材の配列を工夫したことである。

評価カードの例として2つ挙げる(評価カード1および2を参照)。評価カード1は、低音域、具体的にはシ、ラ、ソの運指の理解と演奏技術の徹底をはかることを意図したものである。特定の音の運指に慣れるために、評価カード1のように2曲まとめた評価を行う場合もあった。

相互評価の方法は、全体で一斉に練習した後で、隣同士のペアで交代して評価させた。その際に、各自ばらばらに演奏したのでは相手の音が聴き取れなくなるので、授業者のピアノ伴奏に合わせて演奏させた。演奏後、評価カードに数字を記入して、運指の誤りがあれば教え合うように促した。教え合っているペアも見られたが、この場合は課題がさほどむずかしくなかったこともあり、教え合いの様子はあまり見られなかった。

評価カード1

自己・相互評価カード

*評価の尺度

5 4 3 2 1

とても 全く

よくできた できなかった

上の5～1の尺度にしたがって、数字を書き入れてください。

*教材「オーラリー」

「ラヴァース コンチェルト」(A 2パート)

<自己評価>

低いシ, ラ, ソの運指がわかる。()

2つの曲を, 正しい運指で吹くことができた。

()

<他者評価> (隣の友達 君・さんについて)

2つの曲を, 正しい運指で吹くことができた。

()

* 次の音を吹くときの運指について, リコーダー図の穴をぬりつぶしなさい。

(略。本教材で理解しておくべき運指のなかから3つの音の運指を問うものである。)

評価カード2

自己・相互評価カード

「附属生の指体操」についての自己評価

(評価の尺度は, 評価カード毎掲載しているが, ここでは省略する。)

<自己評価> (数字を○で囲む)

正しい運指とリズムで吹くことができた。

5 4 3 2 1

* 何小節めから何小節めまでがむずかしいですか。(小節めから 小節め)

* どんな点がむずかしいですか。

(運指がわからない 運指はわかるが指がついていかない その他)

* その他を選んだ人は, 具体的にむずかしい点を挙げてください。

()

評価カードは, 低音域から高音域までの運指の理解と, リズムを正しく演奏することをも含めた演奏技術を調べるためのものである。ここでは, 数字での評価

だけでなく, むずかしい箇所やむずかしいと感じる点について内省させ記述させた。

その結果, 41名中, 運指がわからないと答えた者が1名, 運指はわかるが指がついていかないと答えた者が15名, むずかしい箇所はないと答えた者が5名, 未記入が5名, 残りの15名はその他の点でのむずかしさを挙げた。具体的には, 低いファが出しにくい, 高音が出しにくい, 息が続かないなどである。これらの点は, より美しく吹くために達成すべき目標であり, 比較的に女子にこれらの点を挙げた生徒が多かった。

本年度のアルトリコーダーの教材配列は, 以下である。

①ド～ソの曲

「喜びの歌」「かっこう」「聖者の行進」(二重奏)

②ド～低いシ, ラ, ソ, ファの曲

「オーラリー」

③高いラ, シ, ドの曲 (サミング)

「アニー ローリー」

④低いファ～高いドの曲

「ラヴァース コンチェルト」(二重奏), 「附属生の指体操」

⑤低いソ～高いソの曲 (復習)

「アメージング・グレイス」「少年時代」「ソナタ K.331」「ROSE」

⑥高いシbの曲

「きらきら星」「おどるポンポコリン」「にっぽん昔ばなし」(二重奏)

上記のように, 本年度の教材選択とその配列で考慮したことは, 混同しやすい低いシと高いシの運指の徹底をはかるために, ⑤のように既習の運指を新しい曲で復習する時間を設定したことと, 派生音は高いシb 1つにとどめ, また一度に新しい運指が1つ以上含まれることのないように教材選択をしたことである。また, ⑤のソナタでは, ブレスの位置の違いで音楽のフレーズが変わることも意識させた。

2 授業の結果と総括

5月末, アルトリコーダーの学習の初期段階で, 「かっこう」を教材に, A組とB組の生徒のアルトリコーダーの演奏のテストを行った。評価は, 広島大学大学院院生(音楽文化教育学専修)4名によって行われた。評価の尺度は, 評価カードと同じ5段階である。その結果, A組の平均は3.9点, B組の平均は4.18点であった。11月末には, 「附属生の指体操」を教材にしてアルトリコーダーの演奏のテストを行った。この曲では, 運指だけでなくサミング奏法による高音や低音が美しく吹けているかという点も評価の観点に含め

た。この時の評価基準は以下である。

表1 アルトリコーダーの評価基準

得点	評価基準
5	低い音から高い音まで、正しい運指で、まんべんなくめらかに吹くことができている。
4	運指は正しいが、特に上行形で、少し音が切れ切れになっている。
3	低いシカ、高いシのどちらかの運指をまちがって吹いている。
2	低いシも高いシのどちらの運指もまちがって吹いている。
1	全く吹けていない。

11月末の調査の結果は、A組が4.1点、B組が3.98点で、両クラスの間あまり大きな差が見られなかった。また自己・相互評価カードの成果も、数値としては見られなかった。

本年度は、諸事情で、アルトリコーダーが生徒の手元に届くのが例年よりも非常に遅れたことで、アルトリコーダー学習の開始が遅かった。さらに2学期にはインフルエンザによる学級閉鎖等で、特にB組では予定していた授業時間数が確保できなかったことなどで、評価カードの活用回数も、思ったようにできなかった。しかしながら、評価カードを授業開始時に配布することで、その時間のアルトリコーダー学習の目標を確認することができたことや、ペアで互いの演奏を聴き合う際には、学習のなかに一種の緊張感が生まれたことは、授業を振り返って評価できることであるし、またリコーダー図に運指を書き込む作業は、運指を確認する点で有効であったと感じている。

自己・相互評価カードを活用した本研究は本年度で4年めの最終年次になる。これまでを振り返って、評価カードのあり方とアルトリコーダーの学習について考えることがある。

評価カードについて、研究当初は、音楽科の目標である情意的目標、認知的目標、精神運動的目標の3領域の目標が、毎時間達成されるように評価カードを作成していた。しかしながら、本来、価値づけや音楽の知覚と感受に関連する情意的目標をアルトリコーダーなどの技術指導のなかで具体的に設定するのは非常にむずかしく、態度目標や楽しく学習できたかという、大切ではあるが授業のねらうところとは少しはずれた目標を設定せざるをえなかった。しかもその部分の記述がマンネリになってしまうという問題点があった。本年度は認知的目標と精神運動的目標にしぼって評価カードを作成し、上述したように新出の運指に限定して、理解の徹底と技能の習熟を図った。

相互評価は、2人組で互いに教え合う方法では、互いの人間関係から遠慮する面もあり、それを通して演奏を向上させることに対して、あまり効果がなかったように思う。相互評価はグループアンサンブルの発表等の際に、互いに観点をもって聴き合い評価し、演奏者にフィードバックできて初めて効果があると考えられる。

最後に、この取り組みを通して、アルトリコーダーの学習で何を学習させるべきかについてあらためて考えさせられた。正しい運指とリズムで楽譜どおりに演奏することができること（認知的目標、精神運動的目標）がまず基本である。今後は、曲のフレーズを大切にするために、指導者自身が曲中のブレスの位置にさらに留意し、生徒各自が息の使い方に気をつけたり、全員で音の始まりを合わせるなどの意識を育てていきたい。そのような学習の積み重ねが、美しく演奏することにつながり、情意的目標の達成を可能にすると考える。その活動領域で生徒にどんな力をつけさせたいかを見極めながら、学習目標を考えていきたい。

(増井知世子)

Ⅲ 中学校3年生を対象にした授業の概要と考察

1 クラス器楽合奏の取り組みに至るまでの経緯

中学校第3学年の生徒は、これまで器楽活動において一昨年度リコーダーを主に扱い（アルトとソプラノの混合）、昨年度はギターおよび小グループによるリコーダーとギター混合の器楽アンサンブルの取り組みを行った。そして今年度さらに活動の幅を広げ、より編成の大きなクラス全体合奏の取り組みを行った。

実際は、年間様々な領域の活動（合唱・鑑賞・日本音楽の取り組み・創作 など）を組み合わせた授業計画を進めてきたが、本項では器楽活動の取り組みに限定しての記述としたい。

第1学年次は、（通常多くの学校でも実践される課程であるが）アルトリコーダーの導入学習からスタートした。本校は中学入試を課しており、生徒達の出身小学校は様々で学区も広域にわたり、各小学校での音楽科授業の取り組みは様々である。その結果、前段階のソプラノリコーダーの経験さえも個人差の著しい状態からのスタートであった。

平均的には、多くの小学校でソプラノリコーダーの取り組みはされているが、アルトリコーダーについてはほぼ全員が初めての学習となり、一部はリコーダーそのものを扱うのが初めてという生徒もいた。読譜力という観点からも個人差は大きく、以前からの傾向であるが男女差が著しい。またピアノなどの楽器経験の有無も、影響は大である。総じて約3分の1程度の生

徒は、基本的な調性の階名読みも不十分という実態である。

歌唱活動ならば（移動ド唱法・固定ド唱法に関わらず）階名唱を避けてとおることも可能であるが、器楽活動の場合は目的の音を発するには指使いを特定せねばならないので、読譜の問題は避けてはおれない。裏を返せば、器楽活動によって生徒の読譜力の向上が期待できる、と言えるのではなかろうか。

このような実態の中、3年間の器楽活動において一貫して、

- ①個人差を考慮した全体指導
- ②個人指導の強化
- ③生徒自身の創意工夫と学び合い

という3つの柱を意識した。このことは、今年度クラス合奏の段階においても同じである。

昨年度の第2学年次においては、ギターの学習、およびリコーダー・ギターによるアンサンブルとグループ発表の取り組みを行った。この取り組みでは、1学期終了までにギターの基礎的な技術の学習を終え、その後「カントリーロード」や「空も飛べるはず」などの、生徒が学習した範囲内で演奏可能な比較的平易な楽曲を、G-durで学習した。

ほぼすべての楽曲は、ほとんどの場合、主要3和音（I、IV、V）に収束・変換が可能である。これをいずれもセーハを伴わないようにするには、「G-dur」又は、その平行調である「e-moll」に設定するのが最適である。これは筆者の経験上の反省から、生徒の学習意欲をいたずらに削がないための措置である。右手のストロークについては、全音符から2分音符、4分音符、その後より複雑なリズムへと、生徒の様子を見ながら難易度を段階的に上げていった。

2学期に入り、前述のアンサンブルの取り組みへと入った。扱った教材は、「ソプラノリコーダー」「アルトリコーダー」「ギター」の3パート編成として筆者が編曲（ロブレス作曲「コンドルは飛んでいく」）した。最終的にグループを編成した際には、いずれかのパートに固定されるわけであるが、導入段階では全パートの全体学習を行った。個人差は大きかったが、巡回個人指導によって極力対応し、ほぼすべての生徒がひととおり演奏できるようになるまで学習を継続した。

グループアンサンブルの段階に入ってから、学習の主軸は「工夫すること」に移っていき、また練習時の生徒たちの活動自体も、一段と活性化されたようであった。

このような流れで徐々に器楽活動の幅を拡大し、今年度のクラス器楽合奏へとつなげてきた。使用する楽器は変化しても“アンサンブル”に必要な概念は変わ

らない。

- ①自分の段階において精一杯の表現をすること
- ②周りを良く聴き合わせる
- ③自分の役割を理解し音に反映させること

のアンサンブルの基本3点を、昨年度までの段階で培ってきた、とも言える。

2 授業実践の実際

本年度中学3年では、1学期には器楽の取り組みと混声3部合唱の取り組みを隔週で並行して行い、2学期に入ってから10月以降は器楽活動に的を絞った取り組みを行った。

1学期では、主に各楽器の基礎技術や平易なアンサンブル曲を取り扱い、その後以下の楽曲に取り組み始めた。

(1) 楽器編成の決定と初期指導

まず楽器編成であるが、本校は備品楽器が比較的充実しているために、以下のような楽器編成を計画した。

<木管楽器>

フルート、クラリネット、ソプラノリコーダー、アルトリコーダー、テナーサクソフォン

<金管楽器>

トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーホニウム

<弦楽器>

ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ギター

<打楽器>

ティンパニ、各パーカッション（スネアドラム・シンバル等）、木琴、鉄琴

<鍵盤楽器>

ピアノ、キーボード

その他、個人楽器の持ち込みは+a（ファゴット経験者など）とした。

本校は、学年3クラス（40名編成）である。楽器のアンバランスが生じないこと、いったん決めた楽器は原則1年間継続すること、の2点を指導したほかは、編成について生徒の自由選択とした。

初期指導について授業者は全体の巡回指導を行い、リーダーとなる楽器経験者（本校には課外活動にオーケストラ・クラブがあり、ある程度は楽器経験者が各クラスに在籍している）に指導的な役割を担ってもらった。内容は、各楽器の基礎（姿勢や楽器の構え方・音の出し方・基礎練習法など）であった。

ある程度音が出せるようになった段階で、楽器ごと

に平易なメロディ課題（セクションごとにアンサンブルができるようにしてある）を与え、取り寄せた。指導を行う経験者には授業毎に指導内容を確認し、巡回指導でチェックする方法をとった。

(2) 「木星」合奏の取り組み

合奏教材に入ってから授業計画は、以下のとおりである。

教材：組曲「惑星」より「木星」一部抜粋

作曲：G.ホルスト

編曲：原 寛暁（授業者）

目標

1. 器楽合奏のための基礎的な技術を、身に付けることができる。
2. 自分やパート・全体の課題を指摘し、練習内容を組み立てることができる。
3. 楽曲の構成を理解し、相互に聴き合いながらアンサンブルができる。

学習計画（9時間）

第1次・・・教材の試聴，個人練習（2時間）

第2次・・・個人練習とパート練習（2時間）

第3次・・・パート練習と合奏練習（2時間）

第4次・・・録音聴取・相互評価合奏（3時間）

原曲は大編成のオーケストラ曲で技術的難易度も高く、本来ならばとても中学生段階で扱えるような楽曲ではない。しかし中学生の感性に直接響く魅力のあるこの曲を、どうしても授業で扱ってみたかった。そこで、授業者が生徒実態を考慮し、編曲を施すことにより対応した（教材スコアの冒頭部分参照）。

まず、教材の楽譜（パート譜化してある）配布後、楽曲把握のために原曲の鑑賞を行った。そして、それぞれのパート譜がどの部分に対応しているのかを把握させた。

練習に入ってから、1学期に引き続き経験者生徒にパートリーダーの役割を担ってもらい、授業者が巡回指導を行うという段階をおいた。その後、授業前半に生徒によるパート別練習、後半は授業者による合奏という段階を経て、中間発表としての合奏録音を行った。時間も少なく課題の多い録音だったが、それを生徒に聴取させ、気付きをワークシートにコメントさせた。主なものは、以下である。

The Planets (Jupiter)

G. Holst/Arr. Hara

<管・打楽器について>

- ・不協和音をできるだけなくす。（初心者は仕方ないけど）
- ・AllegroからTrpがんばって。
- ・シンバルの叩き方。
- ・ブレスの場所が、あやふや。
- ・木琴，鉄琴，打楽器の中で微妙にズレている。

<弦・鍵盤楽器について>

- ・雑な部分がある。
- ・3連符が甘い。
- ・弓順が不揃い。

<全体について>

- ・途中で速くなったり，テンポがブレる。
- ・細かいレソドミラが合わない。
- ・出だしが揃わない。
- ・楽器があまり鳴ってない。（強弱があまりない）
- ・強調したいところが出ていない。主旋律が聞こえないところがある。
- ・同じラインのパートがよく聴き合えていない。
- ・リズムが不安定で，テンポが速くなったり遅くなったりしている。

<改善策として>

- ・正確に音をとれているか確認する。
- ・打楽器の叩き方を少し工夫する。
- ・一音一音でいねいに出す。
- ・左手で弦をしっかり押さえる。
- ・やりやすいポジションを見つける。
- ・入りのタイミングとリズムをつかむ。

- ・指揮を見る。楽譜を覚えている部分は見ないでやってみる。お互いを意識する。
- ・8分音符をちゃんとカウントする。
- ・もっと思い切って楽器を鳴らして、クレッシェンドなどをもっとオーバーにする。
- ・自分のパートを歌って合わせてみる。
- ・チューニングをした方がいい。
- ・個人練習不足→どこかで「個人練習の時間」をたっぷりとる。
- ・指揮を見なければいけない所に「メガネ・マーク」をつける。

これらの事項を全体で共有し、それが個人練習・パート練習・合奏のどの場面で解決すべきことなのかを考えさせ、意見を述べさせた。

その後、弦楽器・鍵盤楽器グループと管・打楽器グループの2つに分かれ、それぞれに2名ずつの経験者を配属させて指導を行ってもらい、その後授業者の合奏を行うという流れに移行した。

この取り組みのまとめとして、3クラスが一堂に会し、それぞれが演奏を行い聴き合うという合同音楽の授業を行った。そして、それぞれがコメントを記入して読み合った。このことで、お互いが良い刺激を受け合って意欲が向上し、各クラス共に卒業に向けて音楽的な雰囲気がさらに高まったように見受けられた。

3 成果と課題

1, 2年次の器楽の取り組みをさらに昇華し、3年次へとつなげていく流れはほぼ固まってきているように思われる。前述したように、過去2年間の積み上げ無しにいきなり3年になって大規模な合奏をしようとしても、どこかで無理が生じるであろう。また、学校や生徒実態を最大限に考慮した教材化(編曲)を行うことなくしては、この取り組みは成り立たない。逆にこれさえできれば、例えば本校のように管弦打楽器が無くとも、他校でもそれぞれの学校実態に合わせて備品楽器と生徒のリコーダー等を最大限に活用した取り組みも、可能なはずである。

今回はリーダーとなる生徒に具体的な役割を与えることも重要視した。普段は同じ目線のクラスメイトに指導をする、ということに最初は心理的抵抗を感じた生徒もいたが、「指導する」という行為を通して彼らも成長していく姿は、非常に印象深かった。

課題としては、初心者指導の徹底度合と、指導する

生徒の立ち振る舞いに関して、やはりクラス間の格差がかなり見られたことが挙げられる。元々のクラスの雰囲気的活動そのものが決定的に左右されるというのは、どんな音楽活動でも陥りがちなことではある。しかし、それはより綿密な指導方法・評価方法によって解消されなければならない。現状では、まだまだその点において検討の余地があったと言わざるを得ない。

また、年間の少ない授業時数の中で器楽活動に軸足を置くとしても、他の活動(合唱, 鑑賞, 創作など)とどのように関連付け、トータルとして生徒たちの音楽的能力を高めていくのか。今後は、そうしたより大きな視点での検証と実践研究が必要になっていくと考える。

来年度以降への取り組みに向け、課題解決のためにさらに研究を進めていきたい。(原 寛暁)

IV おわりに

これまでに本校音楽科では、「箏を取り入れたアンサンブルの工夫」、「リコーダーとギターによるアンサンブルの工夫」、「ヴォイス・アンサンブルの取り組み」、「ギターとリコーダーによるアンサンブル」、「アルトリコーダーの指導」などにおいて、自己評価カードおよび相互評価カードを用いて授業を改善してきた。

アンサンブルの工夫に関する授業では、グループ活動を通して、アンサンブルに必要な知識や技術を獲得したり、表現の工夫をしたりするうえで、自己評価・相互評価の成果をある程度確認できた。つまり、グループ活動を主体とした表現活動では、自己評価・相互評価は機能していたと言える。しかし、リコーダーの指導のような、学習者個人の基礎・基本の習得を目指す授業での試みでは、残念ながら未だ確実な成果を実証できていない。理由として、次のことが考えられる。第1に、今回の試みは取り組みの期間が短かったことがあげられる。基礎・基本の学習に関しては、1つの単元のみで目に見える成果をあげることは容易ではない。週1時間の音楽の授業では、3か月のスパンであっても技術はなかなか定着しない。ましてや、今回の試みではいろいろなアクシデントが起り、十分な時間を確保できなかった。第2に、自己評価の習慣を学習者に定着させるには、非常に時間がかかることがあげられる。中学校入学後からいろいろな授業で毎時間自己評価カードを用いることによって、ようやく学力向上に結びつくと言えよう。(三村 真弓)